

## J. バトラーにおける「語る身体」の射程

東京理科大学 長野慎一

### 1 目的

本報告の目的は、J. バトラーが言うところの「語る身体」という概念の意味を明らかにし、これと、「客体としての身体」ならびに「身体について語る主体」に関するバトラー自身の構想（以下、「物質化の構想」と呼ぶ）との関係を体系的に示すことである。

### 2 背景

物質化の構想（『問題＝物質となる身体』）では、言説 - 権力（M. フーコー）との関係において、語る主体と語られる対象としての身体が生成する様態が論じられた。他方、『触発する言葉』では、既存の言説体制に介入する「語る身体」が言及されるようになる。そこでは、身体が言葉という形で到来する規範に対して抗い自らを表現する様を論じるべく、S. フェルマンの身体論が援用されている。他方、近年は、言葉に介されるのに先立って自他を知覚し己の理解を表現するという身体の在り方を指摘するために、M. メルロ＝ポンティのそれが引き合いに出されるようになってきている。ただ、それらの各々の身体論を構成する諸概念の関係づけは断片的な水準にとどまっている。

### 3 方法

そこで、本報告では、まずは、上記の複数の身体論に立ち戻り、それらの枢要な概念を比較・検討し、「身体」が「語る」ということの意味を抽出する。この結果に照らしつつ、バトラーが述べる「語る身体」概念の理論的意義を検討する。その上で、この概念が、バトラーの物質化の構想において占める位置を論定する。

### 4 結果

以上から、語る主体に対して、あるいはその内にあつて、身体が、客体以上の何ものかとして現れうる様、ひいては、身体がそのうちで生きている社会的・物質的環境に対して何らかの作用を及ぼしうる様が、理論的に明らかにされる。

### 文献

- Butler, J., 1993, *Bodies That Matter: on the Discursive Limits of "Sex"*, New York&London: Routledge.
- , 1997, *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York&London: Routledge. (=2004, 竹村和子訳『触発する言葉——言語・権力・行為体』岩波書店.)
- , 2015, *Notes Toward a Performative Theory of Assembly*, Cambridge, Mass: Harvard University Press. (=2018, 佐藤嘉幸・清水知子訳『アセンブリ——行為遂行性・複数性・政治』青土社.)
- Foucault, M., 1976, *Histoire de la sexualité vol.1: La volonté de savoir*, Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I ——知への意志』新潮社.)
- Felman, S., 1980, *Le scandale du corps parlant: Don Juan avec Austin, ou, la séduction en deux langues*, Éditions du Seuil. (=1991, 立川健二訳『語る身体のスキャンダル——ドン・ジュアンとオースティンあるいは二言語による誘惑』勁草書房.)
- Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard. (=1982, 中島盛夫訳『知覚の現象学』法政大学出版局.)
- 長野慎一, 2011, 「唯物論者としてのバトラー——女性というセックスの物質性をめぐって」『年報筑波社会学 第Ⅱ期』3・4号合併号: 30-51.